

## 編集室から

新春明けましておめでとうございます。

旧年中も皆様方には大変お世話になり、有難うございました。本年も何かとお世話になると存じます。どうぞ、引き続きご指導・ご鞭撻の程、よろしくお願い申し上げます。

皆様の昨年一年は、如何でしたでしょうか？

新年号表紙の写真は、昨年1月に撮影した湯島天神様の梅です。金沢・兼六園も梅が見事ですが、咲くのはもう少し後になります。思えば去年の今頃は娘の受験で各地の天神様にお参りをしていました。当の本人は受験時期の事を忘れ、すっかり大学生気分。自分の当時を思えばそんなものなのかも知れません。

2001年の新年号から始め、前号で108号を数えたこのニュースレターも、今年いよいよ10年目となる年を迎えることになりました。従来にまして、ご声援・ご鞭撻の程、よろしくお願い申し上げます。

記念すべきこの新春号にご寄稿いただいた藤田さんは、デンマークの大学で教鞭を取っておられた方です。先月号にご寄稿を頂いたはせがわさんが開催されている会合で、ご縁を頂きましたが、とても大きなビジョンを持っている素晴らしい方で、細身のお体の何処からその凄いエネルギーが発せられるのかと感じている次第です。

さらに、新年号から新しいレギュラーの方をお迎えいたしました。能登出身で、今は首都圏で活躍されている川島さんです。川島さんも、このニュースをご愛読いただいている複数の県庁マンの方から御縁をいただきました。これまでのレギュラー陣とともに、よろしくお願いいたします。

本年も皆様にとりまして、素晴らしい一年でありますように。

心よりお祈り申し上げます。(は拝)

このニュースは、計画に携わる若手の技術者を育てることを目的に発行を始めました。その後、計画という仕事の内容や、普段、計画マンがどのようなことを考えているのかなどに触れて、少しでも業界を知っていただければと考えて編集しています。



2010/01

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

〒920-1167

石川県金沢市もりの里1-149-302

電話 076-233-7217

Fax 076-233-7375

Email [usric@neting.or.jp](mailto:usric@neting.or.jp)

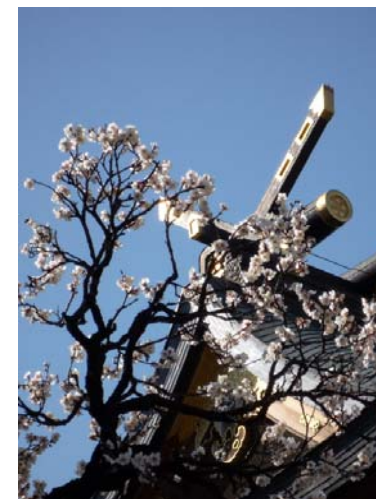
2010/01

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

# 謹賀新年

## 睦月



お江戸・湯島天神にて  
by hama

## 寄稿 『「生きる」ことと恋をしよう』

藤田 さなえ

初詣にくる人たちを見るのが好き。

学校では先生が手をやいているかもしれない男の子や女の子も、恐いお仕事しているかもしれない大人も、笑顔で暖かく輝いている。

それは、たくさんの方が、自分と、自分以外の誰かの幸せを、手を合わせて願っているからじゃないかな、と思う。

周りの価値観や評価や、自分にはめた枠をはずした時、自分が生まれ変わったと思った時、私たちが最初に願うのはきっとこの二つ。

自分の幸せ。そして、自分以外の誰かの幸せ。

ところがここ数年、巷では、いわゆる「成功法則」の本やセミナーが、大流行している。

実は、私も一ヶ月前までは、「成功法則」系のナビゲーター。講師又はスタッフとして、時に受講生として、たくさんの人たちに会ってきた。そして、思った。

成功・目標達成・勝ち組・結婚・年収三千万・出版・独立・・・たくさんの夢や目標。

それらが実現した時、次に何を思うのだろうか。いつ「自分は幸せだ」と納得するのだろうか。人生を、目に見える自分の成功や、目標達成のためだけに使っているのだろうか・・・。

受験をがんばった中高生に、五月病が増えてい

る。「成功」を謳う本やセミナーに群がる人々。「夢がない」と悩む人。小学一年生の10%が、「自分はだめだ」と自己評価をする。

いつから「幸せ」になるのがこんなに難しくなったのだろうか。自分以外の人の幸せを願うのは、初詣の時だけなのだろうか。「生きる」こと自体が素晴らしいはずなのに。

昨年、私は「成功法則」から離れ、「Vision Compass」というBoardセミナーをたちあげた。

「幸せ」は人それぞれ。でも、幸せや成功とは、何を持ち、何ができるかではなく、「どう生きるか」だと私は思う。精一杯人生を使い、「生きる」事を喜ぶこと。自分と、自分以外の誰かの人生を、愛おしむこと。

何のために自分の心と人生を使うのか。セミナーで、多くの人とその事を考えていきたい。

二〇一〇年の初詣。あなたは、何を願われますか。何のためにご自分の人生と心を使われますか。



【プロフィール】  
（ふじた さなえ）

英国留学・デンマークの大学勤務時にテロ、トルコの暗殺事件に遭遇し人生の軌道修正。帰国後Vision Compassを中高大学生・両親・大人にむけて開催。家族は、実子二人とデンマーク人の養子の、二十代の息子三人

## 濱のしづやき 『二と道標』

年が改まり、邦暦では平成二十二年を迎えた。

二という数字は、ある特徴的なペアの顕れを示すと聞いたことがある。例えば、陰と陽・昼と夜・女性と男性。背反しつつも、相手抜きには一方も在り得ない。

昨年末、急遽バリ島を訪れるご縁を頂いた。現地では、白と黒のチェック模様のような柄の布が、建物の柱を始め、飲食店の従業員の腰にまでエプロンのように巻かれていた。尋ねると、ヒンズー教の奥義を示しているらしい。インドネシアという国は、大部分がイスラム教であるが、ここバリ島だけは、ヒンズー教徒が多いという。

ヒンズー教では、万事を生み出す創造神がブラフマーであり、この世を保持するヴィシュヌ、破壊するシヴァの三神一体であるとされている。これらの神々の壮大な説話は、宮崎駿監督の「天空の城ラピュタ」でも引き合いに出されたヒンズー教の聖典ラーマヤナなどに見られる。ヴィシュヌ神は鳥の王ガルーダに乗っているとされ、その鳥の名は彼の国における航空会社名の由来という。ヒンズー教の諸神は後に仏教にも取り入れられ、ブラフマーは梵天、シヴァは大自在天として、我が国でも敬われている。

この創造と破壊という背反しつつも一方のみでは存在し得ないペアを象徴するのが、白と黒のチェック模様なのだという。我々はい、都合の良い一方のみの登場を願うが、この四国ほどの島では、常に対であった一方だけを願うことはできないことを知っている。現地ガイドは、流暢な日本語でこの話を解説してくれた。と同時に、真理を突いている話では無いかと感服した。

このような背反するも同時にしか存在し得ないペアを表す「二」という数字が重なる今年には、何かが開闢する年なのかも知れない。

一方、西暦では二〇一〇年。一〇という切りの良い数字の二倍の数字が、頭に乘る。こちらからも何か一つの時代が始まる印象を受けるが、如何だろうか？

とかく、陰は陰気。破壊は悪しき象徴と受け取りがちである。一方、先人の智慧に「止まぬ雨は降らぬ」「冬来たりなば、春遠からず」という。激動の時代であるからこそ、目先に心を奪われること無く、彼方の標を見失わぬよう、進んで行きたい。

激動の時代とも云われる今日。動きが激しいのは、新しい時代が産まれようとしている兆しと考えれば、その先の世界が現れることが、何か待ち遠しい気もしてくるから不思議だ。今年も如何様に楽しもうか。

## 『 2010年に思う 』

(株)アスリック プロジェクト推進部 五十嵐 政信

気がついたら年末である。この原稿が載るのは新春号だから、平成も22年ということになる。22年かよ。いつの間にこんなに時間が経ったのだ？

そういえば朝まで飲んだくれて帰宅する時、タクシーの窓から市役所を見たら国旗が半分までしか揚がっていないのを見て、「崩御」と気づいてから早や22年。あの時はまだ20代だった。今年は何と50代になる。光陰矢のごとしとはよく言ったものである。この新春号が届くころは、テレビの新春番組も見あきた頃だろうか。そしていつも通りの、年明け、仕事ははじめとなっていくのだろう。不況とはいえ、平和な世の中とはありがたいものである。

話は変わるが、私の唯一の趣味というかルーチンワークというものがある。それはブックオフに2週に1度行って、100円本コーナーを物色するということだ。

相手は100円本だから、気が向いた本はとりあえず買っておく。1回あたり少ない時間で4~5冊、多い時で10冊ほど。そして、自宅の本棚にぶち込んでおく。中には何でこんな本を買ったんだ？というものもある。ほとんど感覚的、衝動的に買い物かごに放り込んでいるので、買った本人もなぜだかわからない本もある。

時々、本棚の前でぼ~と立ってこれらの本を眺めてみる。そうすると、なぜだか「私を読みなさい」と本の方から話しかけてくる。こういった本の中に「当たり」がある。

逆に昨今の新刊書やベストセラーの中で「当たり」にはめったにめぐりあわない。まあ、僕の場合は「当たり」の本には20冊に1冊くらいの割合でしか巡り合わないから、こんなものなのかもしれない。

昨日から読み始めた「旅する巨人」佐野真一著、文芸春秋 もそんな「当たり」の1冊のようだ。まだ3分の1しか読んでいないが、おそらく今年読んだ本の中では、今の自分にとって一番の本となりそうだ。この本は民俗学者の宮本常一と、その生涯を支援し続けた渋沢敬三の交流を描いたノンフィクションである。

3年前、街をブラブラ歩いていた時に、何気なく入った古本屋で買った本で、出版されたのは平成8年だから13年前ということになる。

宮本常一の著作には「忘れられた日本人」岩波文庫という、味わい深い本がある。この本を読んで宮本常一のことを僕は初めて知った。渋沢敬三は、明治の日本で資本主義の骨格を作った渋沢栄一の孫で、元日銀総裁にして、元大蔵大臣である。どこからどうみても、ミスターエスタブリッシュメント。そこいらの成り上がりセレブとは訳が違う、格が違うといった存在だ。宮本常一のパトロンとして渋沢敬三がいたということは、なんとなく知ってはいたのだが、この二人の人生がいかなるものであるかは知らなかった。

げに、事をなす人の人生とは深いものだ。人生の深さとは、直面した壁の高さと、悩みの深さに比例していると、改めて感じ入った次第である。

さて齢50にして人生如何に生くべきか。壁高ければそれもよし、悩み深ければ更によし。2010年、平成22年もチャレンジブルな年であって欲しいし、またそのように生きて行きたいと思う。

## 『 言葉の力 』

SOS代表 川島 嘉浩

本稿を書いているのは2009年12月24日のため、東京の繁華街はどこもクリスマス一色です。賑やかな街の様子を見ると、つつい私も20代のころの恥ずかしくも、ちょっと甘酸っぱい思い出に浸ってしまいます。

とまあ、そんなくだりから始まりましたが、皆様はじめまして。

私は東京、横浜を事業起点として活動しておりますSOS代表の川島嘉浩と申します。主な仕事としては、行政との地域医療・福祉構築のプロジェクト業務、中小企業を中心とした企業・事業再生、プロジェクトマネジメントを専門領域としたコンサルティング事業、東京のK大学、A大学にて特別講師等をしております。

さて前置きが長くなってしまいましたが、初めて執筆させていただくにあたり、まずは事務所の屋号名でもある「SOS」の由来についてお話をさせていただきます。

「SOS」の語源は2つありまして、まずは単純に事業経営などで困っている、苦しんでいる人を助けたいというストレートな想いと、もうひとつはあるアーティストへの感謝の意を含めた意味を持っております。

そのアーティストとは、皆さんもご存じかとは思いますが「Mr.children」です。彼らと私は同い歳でもあり、勝手ながら20代前半からずっと一緒に成長してきた仲間なのです。

そして私にとって最も敬愛するアーティストなのです。

私は以前サラリーマン時代、「資本主義システムにがんじがらめになってしまって図体ばかりが大きくなってしまったこの会社では、真にお客様が喜ぶ価値づくりはできない」と感じていました。しかし、自分が外に出てチャレンジするまでのあと一歩が踏み出せない、ただの傍観者の一人でした。

そんな折、彼らのライブで私の心を揺り動かしたのが「何度でも何度でも僕は生まれ変わっていく、いつか君とみた夢の続きをー」というメッセージでした。私に「大丈夫だ！彼らもいてくれる」というどこか安心感みたいなものを与えてくれたのです。無理して絞り出す勇気ではなく安心感なのです。次の日には事業本部長に退職の願いをしていました。それが当たり前かのような気持ちで。そう単に私はある一曲のワンフレーズで人生が大きく転換したのです。

日本ではよく「言葉」には「言霊」が宿るといいますが、その時彼らの曲は私にとってまさに言霊だったのでしょ。

そう最後の解説がまだでした。その時私に言霊を投げかけてくれた曲はMr.childrenの「蘇生」。そう「S・O・S・E・I」なんです。その頭三文字をいただいたわけです。

今年の目標は、仕事内容、価値観、持つ悩みなど関係なく多くの人が集い、お酒を飲みながら、そこからまた人のつながりが生まれていく場、つまり“飲み屋”を開くことです。そこで新たな「言霊」が生まれることを期待して。

アースウインドアンドファイヤーのコンサートが12月12日(土)に東京国際フォーラムであった。中学生の頃に初めて耳にし、サタデーナイトフィーバー後、ジュリアナ東京前の時代のディスコによく通っていた頃に、彼らの曲は定番だった。もう結成40周年とのこと、フィリップ・ベイリーもモーリスホワイトもかなりの歳かなと思いつつ会場に出かけた。ホーンセクション3、パーカッション3、ベース1、ギター2、ドラム1、シンセサイザー1、そしてボーカルはモーリスホワイトではなく、フィリップ・ベイリーとラルフ・ジョンソンだった。なんと13人の編成。後で知ったのだが、モーリスはすでに引退している。

この東京国際フォーラムのホールAは5000人も入るとてつもない広さ、電話予約してからチケット入手に日を空けたせいで席は相当に後ろになってしまっていた。オペラグラスを持参して行ったのでなんとか顔の表情は確認できた。周囲を見渡せば、同世代が多い、これならコンサート中に立つこともないかとたかをくくっていたら、とんでもない一曲目から皆総立ち、かなたに見える前席の連中はディスコにいるノリだ。フィリップのファルセットボイスが響き渡り「ファンジー」「ブギー・ワンダーランド」「レッツ・グルーヴ」など19曲を披露。18時過ぎに始まったコンサートは、鳴り止まない拍手をよそに会場が明るくなり20時前には終了してしまっただけ。そういえばローリングストーンズの時もアンコールには応えてくれなかった。

コンサート前、せっかく東京に出るのだからと、かねてから気になっていた「江戸東京たてもの園」に行くことにした。

東京駅から中央線に乗ること40分、武蔵小金井に着いた。そこからバスで5分小金井公園の中にある。とてつもなく広い公園で、武蔵野の雑木が高く伸び、名残の紅葉もまだまだきれいで、落葉を踏みしめて歩くのも、なかなか心地よい。見上げればナンキンハゼの実を狙ってか、野鳥も多く来ており、それを被写体に写真を撮っている一団もいた。

目指すたてもの園が見えてきた、ビジターセンターより入園料400円を支払い入った。

西ゾーンが大正末から昭和前期の住宅、さらには江戸時代の茅葺民家に続く。まずはここからだ。最初に目に入ってきたのが洋風デザインの住宅だ。「田園調布の家」と名付けられたその家は、大正14年に建てられ平成5年まで使われていた。玄関 ホール 居間、居間を中心に食堂、寝室、書斎が配置され廊下



はない。各部屋は2面採光が取られるように配置され、真似たいプランだ。外壁は板をドイツ下見張りとし、屋根は寄棟和式の屋根となっている。

隣にあるのは巨匠「前川國男」設計の自邸だ。小生は県に入って営繕課に勤務、その頃静岡県立美術館を係長の下について担当していた。当時、ミレーの「種をまく人」を入手し話題になっていた山梨県立美術館は前川國男の設計によるもので、数回見に行った。レンガ色のタイル、重厚感のあるマッシブな建物が氏のデザインの特徴だ。氏の設計した住宅となれば興味が沸かないわけがない。大屋根、シンメトリーで安定感のある建物だ。アプローチの大谷石の塀がいい。特に入り口部の塀の作りは真似したくなるデザインだ。



家の中は吹き抜けの居間を中心に両側に書斎と寝室がある。洋室でありながらガラス格子窓、内側には太い棧を持つ障子が入る。洋間に似合う障子のデザインは大いに参考になるものであり、小生の自宅の設計には採用させてもらっている。

吹き抜けの背の高い開口部を支えるごとくに立っている丸柱にブツブツと穴の跡が多い。どうやら事務所職員が書いた設計図をこの柱に鋸でとめたようなのである。

建物には基本的に入ることができるので、建築家こだわりのディテールを見るも面白い。

さて、お次はこれまた巨匠「堀口捨巳」どちらかという茶室、数奇屋のイメージが強いので、洋と和の組合せ、キューブと宝形の組合せのこの変わったデザインの住宅には驚いた。説明によれば、氏が訪欧したときに強い影響を受けたオランダ住宅のデザインを日本で試みたものであるとのこと。

宝形の屋根の頂点に置こうとしたロケット状の瓦が、庭にオブジェとしておかれているのが可笑しかった。

次に見えてきたのが茅葺の古民家だ。この園内には多くのボランティアがいる。案内や説明もしてくれるが、大切な仕事がこの茅葺の建物の囲炉裏で薪を燃すことだ。いい雰囲気を作り出すだけでなく、萱を薪の煙で燻さないと、萱の持ちが悪い、防虫、屋根に落ちてくる鳥の糞に含まれる植物の種が萌芽すると厄介であり、このことを防ぐ役割もあるとのこと。軒下には大根が干され、生活感のある演出がある。



一つずつ丁寧に観ていたらすでに2時間が経っていた。まだ西ゾーンだけだ。センターゾーンは高橋是清邸、西川家別邸といった歴史的建造物、東ゾーンは下町情緒漂う昔の商家、銭湯、居酒屋などの町並みになっている。これ全てを観る時間はない、次の東京都立写真美術館も待っている、残りはまた次回にすることとした。園内には見事な桜が多く、次回の楽しみを春にしたいものだ。